

「海はともきれいだ、た」

高こ 村澤 瑠依

小学校の頃受けた授業を僕は今も忘れない。覚えている。大人になることは決して歳が一定のラインを満たすことではない。

ここで一人の生徒はこう発言した。

「後先のことをよく考え突発的に行動しない賢さが想像力を持ち合わせる人が大人だと堂々とは、きりと呈した。

僕はこの頃から、動物に属するトが生み

出した人間社会において一番危険なことは一人一人が想像力を失うことだと確信している。

これが苦海浄土を読んで学んだことでもあり、更に気を付けようと感じたことでもある。

この話は四大公害病の一つである水俣病をテーマにした物で、何度も知識として学んできた事なのに実際何もわが、ていないことに複雑な感情に陥ってしまった。

レッテルを貼ることで物事を先入観や偏見で結びつけ、わがった気にな、てしまうこと

はよくある。おそらく効率的に生きていくために人間が本能的に行っていることなのだろう。

その例として、学校では「メチル水銀を含む工場排水を海や川に垂れ流していた日室」という悪し、被害者である住民という善の平面的かつ二極的な考えでわかりやすく説明を受けた。

しかし実際、日室は財閥のよるな大企業として水俣市の発展を支えていたという事実もある。物事は多面的に捉えて初めて真相を理解することができ、一つの視点だけでの理解は理解とは言えないのだ。

同じ原理で水俣病を多面的に捉えてみよう。水俣病は人や動物の命を軽視した、非人道的な大量殺人と同等であり、決して許してはいけないものだとする考えがある。

しかし一方で、急激な発展や全体の利益のために、ある程度の犠牲はやむを得ないとする、サイコパス的視点の考えもある。

産業自体は水俣の人々の生活のためなわけであり、財政的にもその他さまざま恩恵を住民に与え、地域の活性化を促した。

つまり解釈次第で、工場なしではや、ていけない部分が少なからずあ、たというわけだ。安全のために今ある活気ある地元や便利な生活を捨てられるのか。

情報の隠蔽があ、たとしても会社が悪か、たというだけでは済まされない問題を持つのが公言であり、令和の日本を生きる僕らが読むべき作品だと感じた。

また、この作品は水俣病患者一人一人の悲惨な生活や生き様を生々しく描いているために、読んでいて胸が苦しくなり、もう二度と同じようなことが起きて欲しくないと感じた。

まず手足の異常から症状が出始め、次第にホタンもとめられず、うまく歩くことすらできなくな、てしま。そして最終的に人間としての機能や言語も奪う。

そんな水俣病を患、ているゆきさんが第三

章で、

「うちはもう流暢に話すことができないから、申し訳ないが聞き取りづらくてもよく聞いてほしい。海の上での日々は、本当に幸せだ、た<sub>こ</sub>。」  
と覚束無い声で彼女は語ったのだ。

僕はこの文章を読んだとき初めてこの本に向き合うことができ、自然と涙がこぼれてしまった。  
なぜ私たちだけがこんな痛気を患わなければならぬのか、と窮状を訴えることはせず、ただ海がきれいだ、たと幸福の経験を語り始めるのだ。

自分だ、たらとこの本を通じて何度も何度も想像した。その度に恨みや憎悪、行き場のない怒りの感情が生まれてしまった。

き、と彼女らにも恨みの念は少なからずあったはずだ。それでも彼女らは、背負いきれないほどの苦難を背負ってまあ、世界は美しいと語り続けた。

社会はどこまでいっても不平等であると感じさせるこの作品を通じて、石牟礼道子さんが本当に伝えたいと願ったことは、恨みの連鎖なんかではなかったのだ。

だからこそ今を生きる僕たちは、日頃見逃している世界の輝きを見逃さずしてはならないのだ。

現代社会は、個人が何でも発信することができ、誰もがそれを自由に受け取ることが可能となった。しかしそれは便利である反面、大勢の人を苦しませ、傷つけてしまいかもしれない。

この構図は水俣病問題とほぼ一致している。またここでは冒頭で説明したように、一人一人が想像力を養い働かせる必要がある。

自分の行動が、自分の発言がどこを誰をどのように苦しませてしまおうのかを想像し、客観的に自分を想像し、相手の立場になつて想像すること、世界を恨みの連鎖から立ち切る唯一の手段なのだ。僕は今日も信じている。